

昔むかし、ある女の人に、娘がふたりありました。ひとりには、ローズという名前です、もうひとりには、ブランシという名前でした。ローズは悪い子でしたが、お母さんはローズばかりかわいがりました。ブランシはいい子でしたが、おかあさんは、ブランシにはつらい仕事ばかりいいつけました。

ある日のこと、おかあさんは、ブランシに、井戸へ水をくみにいくようにいいつけました。

ブランシが井戸まで行くと、ひとりのおばあさんに会いました。おばあさんは、「娘さんや。水をくんでおくれ。のどがかわいてたまらないんだよ」といいました。ブランシは、

「はい、おばあさん」といって、きれいな水をくんで、おばあさんに飲ませてあげました。おばあさんは、

「ありがとう、娘さん。神さまのお恵みがありますように」といって、どこかへ行つてしまいました。

しばらくたったある日のこと、ブランシは、おかあさんにひどくいじめられて、悲しくて泣きながら、森の中へ逃げていきました。すると、このあいだのおばあさんに会いました。

「おや、娘さん。どうして泣いているんだね」

「お母さんがわたしをぶつ。それで、こわくて家に帰れないの」

すると、おばあさんは、  
「じゃあ、わたしといっしょにおいで。晩ごはんを食べさせてあげるし、ベッドで寝かせてあげるよ。ただ、ひとつだけ、何を見てもけつして笑わないと約束しておくれ」といいました。

おばあさんは、ブランシの手を取って、森の奥へ入っていきました。ふたりがサンザシのしげみに近づくと、しげみはぱつとふたつに別れて道を開けました。ふたりが通りすぎると、サンザシは、後ろでまた道を閉じました。

しばらく行くと、木を切る斧が二本、けんかをしていました。ブランシは、(まあ、おかしい)と思いました。黙っていました。

また少し行くと、こんどは二本の腕がけんかをしていました。ブランシは、こんども黙って通りすぎました。

また少し行くと、こんどは二本の足がけんかをしていました。

さらに行くと、ふたつの頭がけんかをしていました。ブランシが黙って通りすぎようとすると、ふたつの頭がいいました。

「やあ、ブランシ。神さまのお恵みがありますように」

ようやく、おばあさんの家に着くと、おばあさんは、ブランシに、

「火を起こして、なべにお湯をわかしておくれ」といいました。それから、おばあさん

は、だんろのそばのいすに腰をおろして、自分の頭を外してひざに乗せ、頭のしらみを取りはじめました。ブランシはびっくりしましたが、何もいみませんでした。しらみを取り終えると、おばあさんは、頭をもとにもどして、ブランシに大きな骨を一本わたしていいました。

「これをなべに入れてごらん」

ブランシが骨をなべに入れると、たちまち、なべは、おいしそうな肉でいっぱいになりました。それから、おばあさんは、ブランシにお米をひとつぶわたして、

「これをすり鉢に入れてすりこ木でついでごらん」といいました。

ブランシがひとつぶのお米をすり鉢に入れてすりこ木でつくと、たちまち、すり鉢はお米でいっぱいになりました。

晩ごはんがすむと、おばあさんは、ブランシに、

「せなかをかいておくれ」とたのみました。ブランシはせなかをかいてあげましたが、せなかじゅうにガラスのかけらが生えていたので、ブランシの手は血だらけになりました。すると、おばあさんはブランシの手を取って、ふっと息を吹きかけました。たちまち、手のきずは治ってしまいました。

つぎの朝、おばあさんは、ブランシにいいました。

「さあ、うちにお帰り。おまえはいい子だから、贈物に卵をあげよう。にわとり小屋に行つてごらん。『あたしを連れていって』という卵があったら、それをぜんぶ持つてお帰り。『連れていけないで』という卵は持つてかえっちゃいけないよ。そして、帰るとちゅうで、卵をひとつずつ後ろに投げて割つてごらん」

ブランシがにわとり小屋に行くと、たくさん卵が口々に、「あたしを連れていって」「連れていけないで」「連れていけないで」といっていました。ブランシは、「連れていって」という卵だけを集めて、おばあさんにお札をいって帰っていききました。

帰るとちゅうで、ブランシは卵をひとつ後ろに投げて割りました。すると、中からきれいな卵が出てきました。ブランシは、卵を次つぎに投げながら歩いていきました。すると、ダイヤモンドや、黄金や、りっぱな馬車など、きれいなものがどっさり出てきました。

ブランシがうちに帰りつくと、うちの中はきれいなものでいっぱいになりました。お母さんは、大喜びしました。

つぎの日、おかあさんは、ローズをよんでいいました。

「おまえも森へ行つて、おばあさんから、きれいなものをどっさりもらつておいで」

ローズが森に入つていくと、おばあさんに会いました。おばあさんは、

「わたしといっしょにおいで。晩ごはんを食べさせてあげるし、ベッドで寝かせてあげるよ。ただ、何を見てもけつして笑わないと約束しておくれ」といいました。

ローズがおばあさんについて森の奥へ入っていくと、二本の斧がけんかをしていました。ローズは、

「おのがけんかをするなんて、変なの」といって笑いました。  
少し行くと、二本の腕がけんかをしていました。ローズは、やっぱり、「変なの」といって笑いました。

また少し行くと、二本の足がけんかをしていました。さらに行くともふたつの頭がけんかをしていました。ローズは大声でばかりにして笑いました。すると、ふたつの頭がいました。

「やあ、ローズ。おまえには神さまの罰が当たるだろうよ」

家に着くと、おばあさんはだんろのそばのいすに腰を下ろして、自分の頭を外してひざに乗せ、頭のしらみを取りはじめました。ローズは、

「なんて変なんでしょう」といって大声で笑いました。おばあさんは、

「おまえは悪い子だね。神さまの罰が当たるだろうよ」といいました。

晩ごはんがすむと、おばあさんは、ローズに、

「せなかをかいておくれ」とたのみました。ところが、ローズは、おばあさんのせなかじゅうにガラスのかけらが生えているのを見て、「いやだわ」といって寝てしまいました。

つぎの朝、おばあさんはローズにいいました。

「さあ、うちにお帰り。おまえにも卵をあげよう。にわとり小屋に行つてごらん。『わたしを連れていって』という卵があつたら、それをぜんぶ持つてお帰り。『連れていけない』という卵は持つてかえつちやいけないよ。そして、帰るとちゆうで、卵をひとつずつ後ろに投げて割つてごらん」

ローズがにわとり小屋に行くと、たくさんの卵がガクに、「あたしを連れていって」「連れていけない」「連れていって」「連れていけない」といっていました。ローズは、「連れていけない」といっていいました。

帰る途中で、ローズは卵を次つぎにわかりました。すると、中から、蛇やらかえるやらがうようよ出てきて、ローズの後を追いかけました。しまいに、鞭が何本も出てきて、ローズをぴしり、ぴしりと打ちました。ローズはわめきながら逃げました。やつとこのことうちに帰りつきましたが、おかあさんは、蛇やらかえるやら鞭やらが追いかけてくるのを見ると、ローズを中に入れないで、ドアをピシヤンと閉めてしまいましたとさ。